慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン・ウェイス著 モーゼス・ヘス : 空想的社会主義者
Sub Title	Moses Hess, Utopian socialist, by John Weiss
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.9 (1961. 9) ,p.832(100)- 836(104)
JaLC DOI	10.14991/001.19610901-0100
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610901-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

参照されたい。 身)所収、拙稿「イギリス産業革命史研究についての覚え書」を 一九六一・七・「六ー

ョン・ウェイス著

『モーゼス・ヘスト 空想的社会主義者』

1960, pp. 77.) ist Detroit, Wayne State University (John Weiss; Moses Hess, Utopian Social-Press,

行

である。 の中の観念論的要素を清算し、科学的社会主義を形成していったの ヘスやグリュンの真正社会主義を批判することによって、自分たち へスも再び検討の対象となった。つまりマルクスやエンゲルスは、 若きマルクスの研究が盛んになったことと関連して、モーゼス・

義に向わざるをえないことを教えたのもへスである。エンゲルスの 年、マルクスにライン新聞の編集局へ参加することをすすめたのは へスである。同年、モンゲルスに、ヘーゲル左派は論理的に共産主 へスと、マルクス、エンゲルスの関係は浅くはない。 一八四二

> 者だったといわれる。 紹介者たる栄をもつへスは、一 フォン・シュタインと共に、フランス社会主義のドイツへの最初の 伝記者グスタフ・マイヤーはそれを認めている。更に、ロレンツ・ - 同時にマルクスにとってもまた、フランス社会主義への案内 ーへスの研究家ツロシスティによる

は、まだ資料的に全く未確認である。 主義文献に接した、とある。だが、本格的な研究はその頃か 四二年の十月~十二月頃、マルクスははじめてフランス社会 の接触が、もっと遡られることがある。だがこの点に関して らとしても、最近の研究ではマルクスとフランス社会主義と 青木書店、十八頁)もまた、これを裏打ちするように、一八 「マルクス年譜」(M・E・L 研究所編、 岡崎・渡辺訳、

が、ドイツ・イデオロギーの一部分を書いている、ということだ。 ている部分である。(p. 45) (p. 72, note 6) られていないが強調されねばならない事実がある。 それは、ヘス を計画している。しかも、本書の著者ウェイスによると、意外に知 イギリスにおける社会主義と共産主義の歴史」という翻訳シリーズ 年に、マルクス、エンゲルスとともに「十八世紀以降のフランスと ランス社会主義の紹介者たる実を示すかのように、ヘスは一八四五 しかも、彼自身、その代表者の一人であった真正社会主義を批判し へスはまた、一時マルクス、エンゲルスの協働者でもあった。フ

だが、他方、「共産党宣言」における「ドイツ社会主義または真

出発する。 て答えられる問題であるが、ヘスへのわれわれの関心はこの点から れは、マルクスとヘスとの、具体的な思想交流の究明の中ではじめ あろうか。そして、何が彼らを決定的に分離したのであろうか。そ 正社会主義」での痛烈な批判を想起すれば十分なように、マルクス それでは、マルクス、エンゲルスとへスを結びつけたものは何で ヘスを徹底的に克服されねばならない対象として捉えている。

ルバナーの研究や、彼の編集による書簡集が出されている。 ルカー カーチ、およびコルニュの研究があったが、戦後エドマンド・シへスの研究としては、テオドール・ツロシスティの古典的研究やへスの研究としては、テオドール・ツロシスティの古典的研究や

- alismus und Zionismus, Berlin, 1921 Zlocisti; Moses Hess, Der Vorkämpfer des Sozi-
- Sozialismus und der Arbeiterbewegung, XII, 1926. stischen Dialektik, Archiv für die Geschichte des Lukács; Moses Hess und die Probleme der ideali-
- lienne, Paris, 1934. Cornu, Auguste; Moses Hess et la gauche hégé-
- New York, 1951. Silberner; Moses Hess, an annotated Bibliography.
- 本書は、最近盛んになってきたアメリカでの思想史研究の一つと

; The Works of Moses Hess, Leiden, 1958. ; Moses Hess, Briefwechsel, 1959.

して、ことに数多くはないアメリカでのドイツ社会主義研究の一つ として興味があるのでとり上げてみた。

要約してみよう。本書は序文の他に、次の三章からなる。 モーゼス・ヘスと「人類聖史」。

二、真正社会主義者。

三、ユートピアニズムと科学主義の間で。

の内容だったのである (pp. 24-5)。 論と実践、哲学と政治、などの関係と考えられ、これらの統一、止 ある。ドイツ哲学とフランス社会主義との関係は、理想と現実、理 学をフランス社会主義に直接結びつけようとする考え方であるが 発した(第一章)。一八四一年 スは、ヘーゲルをパリへ、バブーフをベルリンへ導こうとしたので ヘスはカール・グリュンとともに、まさにこれを代表している。へ としての時期であるといわれる。真正社会主義は、ドイツ観念論哲 ヘスは一八三六年、「人類聖史」をかき、 ヘーゲル 左派として出 へスのいう意味での弁証法であり、ひいては、真正社会主義 一八四六年 - 一八七五年におけるモーゼス・ヘス。 - 四六年は、彼の 真正 社会主義者

それぞれ、『精神なき肉体の世界』と ゲル的であった。ヘスは次のように考える。経済学者と神学者は だが、ヘスにおける理想と現実、理論と実際とは、あくまでもへ "肉体なき精神の世界"を作

た。 さて、一八四六年以降、マルクスとエンゲルスの影響による、への代弁者であることを捨て、勇敢に階級斗争と 革命運動に 参加しるの、ともにドイツ・イデオロギーを批判することによって、彼らのし、ともにドイツ・イデオロギーを批判することによって、彼らのし、ともにドイツ・イデオロギーを批判することによって、彼らのの代弁者であることを捨て、勇敢に階級斗争と 革命運動に 参加しの代弁者であることを捨て、勇敢に階級斗争と 革命運動に 参加しの代弁者であることを捨て、勇敢に階級斗争と 革命運動に 参加しの代弁者であることを捨て、勇敢に階級斗争と 革命運動に 参加しるで、一八四六年以降、マルクスとエンゲルスの影響による、へ

だが、やがて一八四八年の革命と、ラッサールとが、彼を再びユ

なかったが、マルクスの「党」とは袂を別ったのである。尊敬と、マルクスによって導かれた、経済的条件の重視は長く失わートピアンにつれもどすのである。ヘスはマルクスの理論に対する

れた。一八七五年死没。権参与のためにたたかい、ラッサールの「国家社会主義」をうけいー八六三年、ラッサールのすすめに応じて彼とともに労働者の政

いっている。彼はこうして空想と科学の間を動揺した〈第三章〉。 経済的矛盾を指摘する時、彼はそれを社会変革のかげにある原動力 としてではなく、社会改良を望ましいものとする条件としてしかみ をかった。」(p. 59)つまりへスがもっとも、 経済的条件に 注意し なかった。」(p. 59)つまりへスがもっとも、 経済的条件に 注意し なかった。」(p. 59)つまりへスがもっとも、 経済的条件に 注意し なかった。「彼は初期のヘーゲル的観念論をすてきれなかった。「彼の るもの、単なる条件、としてしか考えられなかったのだ、と著者は ないっている。彼はこうして空想と科学の間を動揺した〈第三章〉。

Ξ

めよう。 単に本書の著者ウェイスに対して批判を加えるにとどかえさない。単に本書の著者ウェイスに対して批判を加えるにとどギー」や「共産党宣言」によって知られているから、ここではくりへスや、真正社会主義自体に 対 する 批判は「ドイツ・イデオロ

の視点である。ただマルクスとその科学的社会主義に対する漫然たまず第一に、この研究に決定的に欠けているのはヘス研究のため

といえる。といえる。といえる。といえる。といえる。といえる。といえる。というはできないは家を歴史の中に位置づけ、その役割を固定させることはできない点を失ったら、この時代に関していえば、いかなる研究も一人の思点を失ったら、この時代に関していえば、いかなる研究も一人の思点を失ったら、この時代に関していえば、いかなる研究も一人の思想をどうる反感があるだけである。社会主義の歴史の中でヘスの役割をどう

が全く欠けているようにみえる。この本が伝記的解説的であって、 理論的でありえないのはそのためであろう。むしろ、問題視点をも 評価をマルクスの支配から免れさせるために、評価それ自体を放棄 ある。それ以下でもなければ、それ以上でもない。著者は、ハスの にもどして評価しなければならない、ということを意味するだけで たないことが、ヘスの研究書としては異色である、といえるかもし してしまった。この本にはヘスを歴史的に位置づけようとする意図 ふり返えって、非難するのではなく、彼を彼の置かれた時代と社会 想家を評価するに当って、彼に不足するものをマルクスの位置から 不当に低く評価されることが少なくなかった。だが、このことは思 もっている。たしかに今まで、マルクス以前の社会主義はマルクス によって克服されねばならない無知として考えられ、その積極面を れていることに抗議する。 ヘスはそこから救い出されね ばならな 最初からへスを規定してかかる従来の研究に反対し、ユートピア社 会主義に対する今までの評価が、マルクスによって圧倒的に支配さ で、8)。著者のこの主張はその限りにおいて正しいものを マルクスによって克服されるべき思想家として、

れない

た著者の問題外のことである。

「現在、初期マルクスの研究においては、哲学的な「疎外」の概念が、いかにして哲学者マルクスから経済学者マルクスへの発展になが、いかにして哲学者マルクスから経済学者マルクスへの発展に現在、初期マルクスの研究においては、哲学的な「疎外」の概

たとえば山中隆次氏は、この点に関し、ヘスのマルクスに対する。へスの "Geldwesen"は、マルクスの疎外概念に社会的・経済的基がない。コルニュはそれがマルクスの疎外概念に社会的・経済的基礎を与え、さらにヘスが疎外された労働の概念を把握している、といいない。コルニュはそれがマルクスの疎外概念に社会的・経済的基礎を与え、さらにヘスが疎外された労働の概念を把握している、といがない。ホーニはそれがマルクスの疎外概念に社会的・経済的基礎を与え、さらにヘスが疎外された労働の概念を把握している、といがせい、流通面での把握にすぎない。そしてその著"Geldwesen"はいせい、流通面での把握にすぎない。そしてその著"Geldwesen"(1845)は、マルクスの経哲手稿とのちがいを明示するだけである。そこにおいては私的所有と、資本制生産における所有とが、無媒介的にオーバー・ラップしている。このように山中氏は主張しておられる。

ルクスの疎外論と、ヘスのそれとの対比という限られた観点の中でこのように問題をヘスとマルクスとの関係という点に設定し、マ注 経済学史学会、第二十二回大会報告、一九六〇年。

ることには問題があり、 な答えがでたとき、ヘスの存在意義、あるいは研究意義はまた、さ 観点の中で考えることになりやすく、山中氏の場合のように否定的 ルクスの疎外概念の対比という限られた視点の中でのみ、ヘスをみ らに別の所にもとめられねばならないのである。かくて、ヘスとマ 〜スを研究することは、

〜スの存在意義をもそのような限定された 初期社会主義者へス、という更に広い視野

る媒介者となったのだ、という認識すら欠けているのではなかろう 者のように、そのような問題視点をまったく持っていないことは、 において、疎外概念の発展が、彼をして科学的社会主義者たらしめ 本書にとって大きな欠陥であることは否めない。著者は、マルクス をもたねばならないことは明らかであるとしても、 しかも本著の著

新 刊 紹 介

国国 国際経済・第2巻 際 収 支

国際経済の諸現象を理解するため、その歴史 と理論と現状とを体系的に、 の筆者が担当している。現実に生起している 史、理論、政策、現状分析を、専門別に九人 るのに対し、 と比較すると、 された第2巻である。これを土屋氏の前掲書 際経済』全6巻のうちの第一回配本として出 がある。本書は有斐閣が企画した『講座・国 屋六郎著『経済成長と国際収支』中央経済社 る。国際収支についての単行本としても、土 スト・ブックにはかならず取り扱われて された分野であり、国際経済についてのテキ 土屋氏が「経済成長」に 統一 的観点 をお 国際収支は国際経済学のなかではよく開拓 国際収支の理論的分析を主眼とされてい 本書は国際収支についての歴 次のような特色がみられる。 かつやさしく解

> く」ないかもしれない。 ただし、とくに理論の部分はあまり「やさし 明する、というのが講座全体としての狙いで という章構成もこの趣旨に沿っている。 国際収支の現状分析、国際収支ゼミナー 金本位制の理論と歴史、Ⅱ 国際収支論、 本書の、序説 国際収支と国際協調、

ての難点である。 ている。これが「体系的」ということについ あり、 現状分析を担当した人も、多少は理論に触れ ないまでも、 ているので、これらの間に意見がくいちがわ 取り扱った 「国際収支ゼミナール」、 さらに 執筆者によって意見がくいちがうということ は少ない。 国際収支理論はいわば技術論であるから、 その場合説明の仕方もいくらかは違っ しかし理論部分と、問題と文献を 重複していると思われる箇所が

は、巻末に事項索引が必要であろう。 経済事典の役割」を本書に果させるために 本書が第一回配本であり、他の巻は末だ刊 講座全体のもう一つの狙いである、「国際

行されていないので、講座全体の批評はでき ないが、本書だけについていえば、 国際収支

> (有斐閣刊・A5・二四九頁・四五〇円) れる。学生諸君にとっては国際収支について 新の問題についての現状分析に興味が見出さ の入門書としても利用できると思われる。 も多いので、ドル危機、貿易の自由化など最 理論と歴史についてはすでに書かれたも

矢内原 勝一

木村健康・久保まち子・村上泰亮共訳W・W・ロストウ著

『経済成長の諸段階』

書には、その理論の形式的及び内容的両側面 nomic Growth.—A Non-Communist Ma-から、いろり る公衆の耳目を魅するような副題をもつこの 親しまれようとしている。「非共産党宣言」な 邦訳がなされ、わが国の読書界にも更に広く きたことは周知の通りであるが、ここにその 来、各国の識者の間に多大の関心を惹起して mifesto, 1960. - この原著は既にその出版以 W. W. Rostow, 、興味ある特色がある。まず従来 The Stages of Eco-

紹

一 〇 五 (八三七)